

一九二〇年代における瞿秋白の「市儈」観について

—ゴリキートとの関係を中心に—

白井澄世

問題の所在

清末民初は、儒教を支柱とする伝統的知識世界が崩壊する一方、世界の新知識が流入し、価値観が激動した過渡期であった。中でも科擧の廃止と新しい学制の施行は旧来の知識人の在り方を変え、新しい知識人の登場を齎したが、伝統的な知識人の存在意義が急激に失われる中、新しい知識人への転換は容易な事では無かった。

このような過渡期に成長した瞿秋白（一八九九—一九三五）は、自己が属する古い知識人が新しい時代に如何なる存在意義をもつかという問題を一貫して追求した知識人の一人であると思われる。それは没落士大夫の家庭に生まれ、中国共産党の革命家として生きた彼の人生の選択にも現れている。だが彼は人生の終わりに『多余的話』を書き、自分はボルシェビキの戦士でも革命家でもなく、中国の「遺産」である「文人」に過ぎなかつたとして、政治運動における自己の人生を否定的に述べた。⁽¹⁾ そのため、瞿に対する評価は従来、彼を青白き書生とする批判と、革命家としての賞賛とに分裂する傾向にあつた。革命家としての彼を評価する人は『多余的話』の消極性を批判し、一方、『多余的話』を「自己表現」として評価する人は革命家となつた瞿の精神構造に否定的であつた。⁽²⁾ だがこのような評価は一面的な

ものであり、彼の全体的な精神構造を捉えているとは言い難い。必要なのは彼の精神の軌跡を辿り、矛盾する精神構造を明らかにすることであろう。例えば、錢理群は瞿を、革命に突き進むドン・キホーテ的な事業の追求と自己分析的なハムレット的自己との矛盾を持つ知識人であると指摘し、これらの矛盾は「真実」への追求において統一されていたと言う。また、そのような知識人の魂の記録が「多余的話」であつたと言う⁽³⁾。

本稿でも、瞿秋白は矛盾を抱えつつ自己と事業を追求した知識人であるとする立場に立つ。但し、本稿が注目するのは彼の矛盾の統一の過程である。まずは彼の矛盾を見たい。

私の紳士意識…は実際、始終脱ぎすてられないものだった。同時に二一、二歳の、まさにいわゆる人生観の形成時期に、理智の方面ではトルストイ流の無政府主義から直ぐにマルクス主義に転じた。(略)しかしマルクス主義とは何だろうか？それは無産階級の宇宙観と人生観である。それは私の潜在する紳士意識、中国流の士大夫意識、及び後に変質した小資産階級あるいは市僧流の意識と完全に矛盾した。没落した中国紳士階級の意識の中には、例えば仁慈礼讓、鬪争の回避、寄生虫式の隠士思想などの性質がある。完全に破産した紳士は往々にして都市のボヘミアンになる…高等遊民で、退廃的で脆弱でロマンチックで妄想的ですらある人物で、実際のところ役立たずだ。思うに、この二つの意識は私の内心で絶えず鬪争し、私の極めて大部分の精力を蝕んだ。私はいつも自分の紳士と遊民流の感情を抑え、獲得したマルクス主義の理智で新しい感情や新しい感覚方法を無理して作り出してきた。しかし無産階級の意識は私の内心では始終本當の勝利を得ることが無かつた。(略)このような三元化した人格を、私はどうに知っていた…。(略)

しかし真相は結局暴露され、二三元⁽⁴⁾の中では必ず一元⁽⁴⁾が実際の勝利を得る。まさに政治的な疲労と倦怠のために内心の思想鬪争はこれ以上持続できなくなつた。実際、四中全会〔注〕瞿が王明らに批判され、中央組織から排斥された一九三二年の大会)の後、私は既に全くの市僧となつた。政治問題に対して意見を述べることを極力避け、中央の意見に従つて意見し、間違つていると言われれば即座に過ちを認め、弁解したいと思わず、日和見主義だと言われたら日和見主義でよかつた。(4) (傍点―白井)

瞿の言葉によると、彼の葛藤は「無産階級の宇宙観と人生観」であるマルクス主義と「紳士意識・士大夫意識・市儈流の意識」との矛盾に因る。そして最終的に「市儈」意識が勝利を占めたと見えよう。「市儈」式の意識とは、小資産階級・高等遊民の意識であり、革命においては主体性の無い「日和見主義者」の意識を指すと思われる。錢理群は瞿の一九三二年の文章から、「市儈」の人生観とは「信仰心を打ち破る利己主義」であり、「士大夫意識」「都市のボヘミアン」と同じく、精神の自由を求め、闘争を避ける彼の本質を指すとする。⁽⁵⁾

だが、彼の二元的精神構造の中で最終的な位置を占めた「市儈」意識は、瞿が革命における知識人として自己認識する際の、より切実な意識だったのではないだろうか。本稿では以上のような疑問から、瞿秋白における「市儈」意識を解明したい。但し瞿の「市儈」についての言及は時代的なズレもあり、ここで全体像を描き出すことは手に余る。そこで、まずは彼の人生観の形成期である一九二〇年代における「市儈」意識を明らかにしたいと思う。

その際、彼の「市儈」概念に影響を与えたゴリキーとの関係から論じたい。中でも注目したのは、中共入党時期であり、瞿の思想的転換期でもあった一九二二年二月に翻訳され、『赤都心史』に掲載された詩である（『阿弥陀佛』『赤都心史』四四）。実はこの詩はゴリキーの論文「小市民（市儈―白井注）」についての覚書⁽⁶⁾の挿入詩の翻訳であった。だが瞿は、翻訳に際して原作者の名を付さず、自分の作詩であるかのようにひっそりと掲載した。この詩の翻訳意図、そして彼のゴリキー像を明らかにすることにより、瞿秋白の思想形成の側面を解明し、彼の「革命家」への転換過程をも明らかにすることができよう。本稿は、瞿秋白の「市儈」概念の検討を中心として、革命家となる人生の転換過程を再検討する試みである。

一・「市儈」について

(一) 瞿秋白の「文化」革命観

瞿秋白が「市儈」という言葉を用い始めたのは、ロシアでの見聞や思索を書いた随筆集『赤都心史』冒頭のエッセイ「黎明」においてである。⁽⁷⁾この時、彼はモスクワに到着したばかりであった。一九二一年二月である。当時、モスクワは革命後の混乱により悲惨な状態にあったが、彼は期待に満ちてロシアの黎明を眺めていた。とりわけその期待は、モスクワを新旧「文化」の交代する場所としてとらえることにあった。「危難が窮迫し、餓えと寒さ、戦禍と疫病に苦しむ赤都では、文化の明星はうす暗いが、新旧二つの流れは並行して緩やかに進んでおり、燦爛として莊嚴な将来を静かに待つことができる」⁽⁸⁾(傍点―白井)と言う。

このような文化史観によるロシア像は、彼がロシアに來た理由の一つでもあった。瞿は五四運動に参加した翌年、『晨报』記者としてロシアに赴くが、その理由の一つが「世界初の社会革命の国家、世界革命の中心点、東西文化の接触地」⁽⁹⁾(傍点―白井)であるロシアにおいて、中国再生の道と自己の進むべき道を求めることにあった。五四期、中国社会の改造を求めてマルクス主義に関心を寄せつつあった彼は、新しい国家を創出した「革命」の方法や主義をロシアで学ぶことを期待していたと思われる。その際重要なのは、彼が世界の動きを文化の衝突・融合として捉え、ロシアの「世界革命」から東西文化を止揚する方法を学ぼうとしていたことであつた。このように彼の共産主義、マルクス主義の理解には文化的な理解が根底にあつた。⁽¹⁰⁾

そのモスクワにおいて、瞿は新旧文化の交代を、資産階級(ブルジョワ)文化と無産階級(プロレタリア)文化の交代として見ていた。これは具体的な芸術文化を指すというより、むしろモスクワの街に見られる文化の状況を指すと思われる。当時、モスクワでは未来派が流行しており、瞿もマヤコフスキーから詩集を贈られたり、未来派の劇を鑑賞

したりしている。その一方、瞿は旧芸術である歌劇も鑑賞し、その荘嚴さに満足しながらも、未来派に新たな文化の兆しを直観し、それが「資産階級文化の夜の名残、無産階級文化の朝の始まり」⁽¹¹⁾であるとして、期待を持って眺めるのである。

その、最後の輝きにも似た光芒を放つ資産階級文化を、瞿は次のように表現した。「あらゆる資産階級の芸術文化はしだいにかすかにその階級性、市僧氣質を現した」「遊蕩に耽る市僧の楽しみは、特に明るく健康的な労働の歌に譲りたくないのだ」(傍点―白井)。『漢語大詞典』によると「市僧」とは元来「仲買人(原文:牙僧)」「商人」を指し、「私利を貪り巧みに投機する人」という悪いイメージを持つ言葉である。だが瞿は、末期の資産階級(ブルジョワ)及びその文化を指す言葉として使っていると言えよう。「市僧」は瞿にとって無産階級(プロレタリア)の登場によって消失すべきものであった。だが、ロシア滞在中に彼は「市僧」の隆盛を目の当たりにしていくのである。

(二) ネット下のロシア―「悔い改めた貴族」と「市僧主義」

瞿秋白がロシアに到着した翌三月、新経済政策(ネップ)が施行された。ネップとは資本主義的發展を特徴とする総合的経済政策である。当時、モスクワの経済は破壊的状况にあつたが、ネップ施行後、とりわけ瞿が滞在した一九二一―二二年は復興・成長期であつた。統制経済から自由経済への切り替えは市場に物資を呼び戻し、人々の生活は上昇した。だが、一方では個人企業家「ネップ・マン」が台頭し、にわか成金が現れた。またトラスストなどの組織化も許され、資本の独占が進んだ。瞿はネップを決定したロシア共産党第十回大会に参加し、「ソビエト・ロシアの経済問題」という記事で報道している。⁽¹³⁾記事の中で瞿は、社会主義革命の意義は経済改革にあるとしてネップの妥当性を強調している。彼はネップ開始直後、大量販売のパン屋の出現に資本制度發展の素早さを見て驚くが、労働者の生活が上昇したことに目を向けている。共産主義の原理と反する状況を、現実から擁護しようとする姿勢が窺えよう。

だが「ネツプ・マン」がのさばる現実は、瞿にとつて耐え難いものに映つたようである。彼はネツプ・マンを「新資産階級」と見なし、その性質を「市僧主義」とするのである。例えば八月の大飢饉の際、ネツプ・マンが大店舗を経営して儲かりながらも義捐金を出し渋る様子を、「利益……利益、麻痺した神経、黒々とした良心……これが市僧主義の標識なのだ」と憎々しげに書いている。⁽¹³⁾ 瞿にとつてより耐え難かつたのは、このような現状が「社会革命の国家」ロシアの現実であるばかりでなく、かつて革命に貢献したはずの「貴族智識階級」がネツプ下で惨めな状況にある事であつた。「貴族の巢」（赤都心史）一六）では、十月革命で消滅したはずの貴族が小資本を集め、カフェを開店する様子を見て次のように述べる。「ロシア貴族の智識階級は元来、資産階級の文化を最も憎んできた。ゲルツェンは、西欧文明は、市僧制度に他ならないと言つた。今や（貴族は——白井注）皆、資産階級の中の哀れな落伍者にならうとしている。しかし、しかし、あの悔い改めた貴族、民間へ行つた青年は一世紀以来、社会思想において労働人民に齎した功績は浅くない。共産党の指導者の磊落な人物の中にも過去の貴族は少なくないのだ。」⁽¹⁵⁾（傍点——白井）つまり瞿は、新たな資産階級が登場する一方、「市僧制度」を弾劾してきた「貴族の智識階級」が落ちぶれるネツプの現状を、このように述べたのである。

ここでゲルツェン（一八二一—一八七〇）の言葉が引用されているように、瞿が用いた「市僧」とはロシア語「Мещанин」の訳語であつた。（注：現在では「小市民」と訳される。本稿では瞿秋白の文章には原文「市僧」を用い、其他の文章では「小市民」を用いた。詳しくは注釈を参照のこと）。「Мещанин（小市民——市僧）」とは、帝政ロシアで形成された都市の小市民階級で、小商人や職人などの下層市民を指す。⁽¹⁷⁾ 一九世紀以来、ロシア知識人・作家の主要テーマの一つは、資本主義の侵入や都市化に対するロシアの民族性であつたが、「Мещанин」は資本主義を体現する俗物的な人間性として、知識人の弾劾の対象となつてきた。中でもゲルツェンは近代市民社会と資本主義制度を批判し、ロシアでの社会主義発展を追求したため、農奴解放やナロードニキ運動の先駆者として一九世紀ロシア知識人に大きな影響を及

ぼしたのである。⁽¹⁸⁾ よって、瞿秋白がゲルツェンの言葉を引用してネツプの現状を批判した裏には、一九世紀のロシア知識人に対する共感があつたと言えよう。だが、ここでゲルツェンの原文にあたり瞿秋白の「市僧」概念を解明することにはあまり意味が無いと思われる。重要なのは、彼がゲルツェンのような一九世紀「貴族智識階級」の意識に立ち、一九二一年のロシアにおいて「市僧」を見いだした事である。瞿は学生時代にロシア語専門学校で学び、一九世紀ロシア文学の愛好家だったことから、既にこの語彙を知っていたと思われる。だが「市僧」という言葉が五四期の文章には現れず、ロシア滞在中に現れた事は、「市僧」が瞿にとってロシア社会の中で実感されたものだったことを示している。

そのロシアの現実とは、かつての「貴族智識階級」が力を失い、「資産階級文化」である「市僧主義」を弾劾する力を失っているというものであつた。彼はそれに危機感を覚えるのである。例えば「新資産階級」(「赤都心史」二二)では、瞿の友人が、共産党員の親戚が開いたカフェで女店員がおそらく売春している話を聞いて憤る様子を、「郭質生は、非政治主義者⁽¹⁹⁾であるが一貫して熱烈な悔い改めた貴族⁽¹⁹⁾で、市僧主義の文化を蔑視する」(傍点―白井)と形容している。つまり彼が見た当時のロシアとは、拜金主義的な「市僧主義」である「新資産階級」が台頭し、反対に「貴族智識階級」が無力化した社会であつたと言えよう。彼にとつて「市僧主義」はロシアの生々しい現実であり、それに対抗しうる勢力を早急に見いだす必要があつたと思われる。

(三) 『ロシア文学史』における「余計者」と「反市僧主義」の知識人

以上のように、瞿はネツプ下のロシアにおいて、「悔い改めた貴族」や「民間へ行った青年」というロシア知識人が、もはや「市僧主義」の前に無力であると認識したと思われる。だが、それはロシアの現実からばかりでなく、瞿が歴史的な考察から得たものでもあつた。瞿はロシア滞在初期、集中的にロシア文学を研究していたが、その成果である『ロ

シア文学史」(以下、「文学史」と記述)には、十九世紀の知識人と「市僧」との闘争が描かれているのである。⁽²⁰⁾注目すべきは、瞿が『文学史』の中で二種類の知識人の系譜を描いていることである。

その一つが、「余計者」から「悔い改めた貴族」「民間へ行った青年」へという「貴族智識階級」の系譜である。瞿の記述に即して述べれば、「余計者」とは無用の智識しか持たない利己主義者であり、プーシキン「オネーギン」を祖とし、ツルゲーネフ「ルージン」「バザーロフ」らに到る貴族の知識人である。だが、瞿は「余計者」出現の背後の経済変動に目を向けていた。彼らはロシアの伝統的農奴制度が資本主義の侵入によつて崩壊しつつあった過渡期に現れた存在であるとされる。つまり「余計者」とは、新・旧、東(ロシア)・西(ヨーロッパ)、農奴制・資本主義という時間・空間・経済制度の過渡期に現れる貴族の知識人とされているのである。更に瞿は彼らの内部をも分析する。彼らは貴族の習慣と、後に得た「理智」との矛盾に苦しむが、「理智」が勝利することはない、彼らは空談をするだけの「なろうとしてもなれない英雄」⁽²¹⁾なのだと言ふ。だが、彼らの存在は社会思想発展の一過程であり、やがてその事業は次世代の人々に引き継がれるとされる。つまり瞿は「余計者」の「余計さ」に存在意義を見だし、次の政治運動への一段階としたのであった。

そして農奴解放後、「余計者」の意識を引き継ぎ「民間へ行った」知識人が、一八六〇〜七〇年代に登場する「悔い改めた貴族」であるとされる。彼らは社会改革を望む「英雄」であったが、資産階級が台頭するなか、理想派の社会運動は沈滞して神秘主義へと逃走してしまったと言ふ。この代表がトルストイとドストエフスキーだとされる。瞿は両者を次のように述べる。「彼らの偉大さは芸術の真実さにあり、当時のロシア社会の『沈鬱な心霊』を反映している。清廉潔白な貴族の社会的地位が日々崩壊し、普通の雇用者となつて、どうして生臭い市僧氣質(原文「市僧氣」)に耐えられようか(後略)⁽²²⁾(「傍点―白井)」。ここにおいて「余計者」を祖とする「貴族智識階級」の社会的自覚と政治運動は、「市僧氣質」の前に無力となることが描かれるのである。それは同時に、貴族智識階級という「庸俗に対する強烈な個

性⁽²³⁾＝「英雄」の存在意義の終焉をも描いていると言えよう。

一方、瞿は、存在意義を失った「貴族智識階級」に代わり、「市儈」に抵抗する新しい知識人の系譜を一八六〇年代以降に登場させた。それが「反市儈主義」の知識人の系譜である。まず六〇年代、商人の愚劣さを書いたオストロフスキーをあげ、「ロシアの文学者は、市儈主義」に反対しないのではなかった⁽²⁴⁾として反「市儈主義」の知識人の祖に位置づけている。続けて、貴族智識階級の政治運動が挫折した後の一八八〇～九〇年代を、資本家が「市儈の幸福」を追求した「市儈主義の時代」⁽²⁵⁾であったと言う。この時代には「理想や道徳、事業や新しさを重んじず、金儲け、金儲け、金儲けすることしか知らない」「汚物」⁽²⁶⁾である「市儈」を描いた作家が活躍したが、この時代の代表作家がチェーホフであったと言う。だが、チェーホフ作品の知識人には「市儈主義」を弾劾する力が既に無いとされる。これに代わり、「市儈主義」を弾劾し、上層社会を転覆する新しい勢力を見いだして描いた作家が「反市儈主義の闘将」ゴリキーであったとして、瞿はこの系譜の最後にゴリキーを位置づけるのである。ゴリキーが描いた人々とは、新しい「英雄」＝「遊民の無産階級」という「平民」⁽²⁷⁾であった。そして彼らは一九〇五年の第一革命の先触れとなる新しい勢力だとされるのである。

それでは、「平民」が政治運動の主力として登場した時、知識人は何をなすべきかという問題に対して、瞿はゴリキーの言葉を引用して次のように述べている。「ゴリキーの市儈は〔チェーホフよりも〕白井注〕更に巧みで狡猾な人血を吸う猛獣毒蛇である。市儈主義に反対せよ！市儈主義に反対せよ！文化生活は：既に非常に仕立ての悪い服であり、一般的な人の体には合わない：市儈はそれをもみくちやにし、ひどく縮めてしまった。智識階級の文化使命はそもそもこのようなものに過ぎない！⁽²⁸⁾」つまり瞿は、「智識階級の文化使命」を「反市儈主義」の提唱という役目に見いだしていると言えよう。

『ロシア文学史』における「市儈」の位置づけと二つの知識人の系譜から、瞿の関心の所在を知ることができよう。

瞿は一九世紀ロシアの政治運動史において、「貴族の智識階級」＝「英雄」の政治運動の挫折と終焉から、「遊民の無産階級」＝新たな「英雄」の登場へ、という政治運動の主体の移行を見ている。そして知識人の存在意義は、政治運動の担い手から、「平民」による革命の脇役として、「反市僧主義」を唱える「文化使命」を果たす役割へと移行しているのである。その新しい知識人が、「反市僧主義の闘将」ゴーリキーであった。そして、この移行をもたらしたものが「市僧」という、資産階級文化の担い手の登場であったと言えよう。つまり瞿は、一九世紀ロシア政治運動の歴史において、「貴族智識階級」の終焉の必然的理由と、新しい知識人の存在意義を模索したのだと考えられる。

二．瞿秋白における自己認識

(一) 中国の貴族智識階級の運命

ネップの現実とロシア一九世紀の知識人への洞察は、より現実の問題として、瞿に中国の知識人の運命を考えさせたとと思われる。瞿にとって、資本主義の侵入によって農奴制度が崩壊したため、政治運動の主体から退く一九世紀ロシア知識人の運命は、同じく資本主義が侵入し、伝統的な農業制度が破壊したため存在意義を失った中国知識人の運命に重なるものだったと言えよう。それは自己の存在意義をめぐる問題でもあった。そこで瞿は、従来からの問題であった中国の貴族智識階級「士」の階級の運命を考える事を余儀なくされるのである。

「家書」(「赤都心史」三三二)で、彼は理論的に「士」の階級の運命を述べている。彼の認識によると、「士の階級」は嘗て儒教により特権階級にあったが、外国資本が流入し、西欧化した新しい資産階級が登場したことによって経済的に破産させられ、一方では儒教を支柱とする中国の伝統文化も破産したため、彼らの存在意義は消失したと言う。今や、彼らは新たな支配階級である軍閥・帝国主義に奉仕する政客・買弁となるか、労働者となるしか道は無いと言う。そして瞿は「士」が無産階級化⁽²⁹⁾することのみに将来を見いだすのである。

続いて「我」(『赤都心史』三三)で、彼は「士の階級」の一員である自己の運命も理論的に見いだそうとする。まず彼は、自分は幼い頃から世界の数種の文化によって育まれたため、既に純粹な中国性を証明できないと述べる。彼は他でも、自分は清末の社会変動期に育ち、辛亥革命後には「欧化」した「死せる科学教育」を受けたために、「完全な中国文化の産物」では無くなったことを述べている。⁽³⁰⁾つまり彼は自身が一つの「文化」混淆の体現と考えているのである。

問題は、彼の内部でそれらの文化が対立し、彼自身に明確な支柱を失わせていること、更にそれらの文化が「旧時代」のものであることだった。「現在、二つの文化は過去を表すもので、どちらも危険な病状に瀕している。一つの病は資産階級の市儈主義であり、一つの病は東方式の死滅である」(傍点、白井)と言う。⁽³¹⁾瞿の言葉に即せば、「東方式の死滅」とは存在意義を失った「士の階級」の文化であり、「資産階級の市儈主義」とは、中国に侵入した新しい資産階級の文化を指すと思われる。彼は、世界の文化・経済変動の視点から、この両文化が彼の「過去」を形成し、内部で葛藤していると認識する。そして、今や東西文化は融合へと向かうという時代認識から、自己の内なる「文化」も融合し、新たな文化＝新たな自身の「個性」を創出する必要があると考えるに到る。

この新たな「個性」創出の選択は、次のように表現される。「様々な民族の文化が交流し、あるいは衝突する時、人類進歩の過程において、ある者はこの過程に尽力すると同時に自己の個性を実現する、乃ち人類の文化を促進する。ある者は一つの民族の文化性に固執し、融合・適応できず、自ら個性を疲労させ、旧時代の犠牲となる。ある者はなんと「無知」をさらけ出し、「…」民族の個性を埋没させ、個我を損ない、所謂「新派」に従属する。三者の中で、どれを取れるだろう？」⁽³²⁾

この抽象的な三つの「個性」は、瞿の認識に即して述べるならば次のように言えるだろう。各「文化」が融合・交流し、「人類の文化」になる時勢において、第一の個性は「進歩」の実現のために働き、そうすれば同時に彼の内なる文化も実現し、自己は存在意義を持つ。だが、第二の個性は旧時代の中国文化に固執するため、存在意義を失う。第三の個性は「無知」

であるために民族性を放棄し、新しい「欧化」の「市僧主義」に従属する。そうなれば中国文化の復興もありえないと言ふ。そこで彼は、第二の個性（内なる「士」の階級）意識に固執する個性」と、第三の個性（「市僧主義」に従従する「無知」なる個性）を拒否し、第一の個性を撰んだと思われる。つまり彼は、旧来の「紳士」意識と、新たに身につけた「市僧」意識を同時に克服する道を、彼の内なる東西文化の止揚＝「人類の新文化」創出という理論に見いだしていると言えよう。

こうして彼は、「世界の文化運動」の隊伍に参入する「新時代」の活発な幼児」になることが「我」の存在意義だと考えるに到る。⁽³³⁾ 瞿において、この「人類の新文化」は「無産階級文化」であり、「世界の文化運動」とは無産階級文化革命に他ならない。そこでこそ中国文化＝民族性の再興も可能であると瞿は言う。つまり彼は無産階級文化革命に参与することが、自己実現の道だと認識するに到ったと言えよう。

だが、彼のこのような新しい自己の存在意義の発見は、観念的な理詰めさを感じさせる。彼は、ロシア史から得た歴史の教訓に則つて、自己と中国の問題の解決法を理論的に導き出したに過ぎないと言えよう。

(二)「余計者」意識と「英雄」観

実際、彼が肺病によつてサナトリウムに入院し、社会から隔離されると、見出しつつあった道が「理智」の結論に過ぎなかつた事を吐露するのである。個人から世界を生み出そうとする彼の未来先取的な思考は、活動基盤が失われた時、個人内部の過去の探求に向かう。その時に現れた自己像が「余計者」であつた。

「中国の余計者」(「赤都心史」三五)において、瞿は次のように述べる。「我」は欧華文化の衝突の犠牲で、内的に調和せず、現実とロマンが矛盾し、そこで、社会の助けが無いので更に「我」の力を損ねた。私はついに「余計者」になつてしまつた！「略」自分はかつて一般人と異なると思っていたが、顧みれば何も特異な事など無い、全く可笑

しい限りだ。庸衆と同じでしかるべきなのだ。おまえは何が出来るのだ、庸衆と同じで良いではないか、理智の結論はこうである。だが感情の傾向が却つて遠大になる、一体どうしようか。心と智が調和しない⁽³⁴⁾。(傍点―瞿)

この「智」とは、無産階級革命に参与する「我」を志向する人生観であろう。言い換えるなら、いつか「無産階級化する」「士」として「世界の文化運動」に参加し、意義を持つ「我」を実現させようとする「智」である。だが「個性」を生かす環境が失われた時「理智」は役に立たず、代わりに募るのは古い中国文化に根ざし、英雄的な感情を持つ「心」である。ここにおいて彼は新と旧、東と西、心と智、英雄と庸衆という相剋において、「余計者」である自分を認識していると言えよう。

だが瞿は「余計者」の「余計さ」に進歩の意義を見ていたように、彼自身も「余計者」意識を乗り越え、現実の闘争に参加する契機を求めていたと思われる。事実、その二ヶ月後に彼は転換期を迎えて入党する(一九二二年二月)。陳正醒は、瞿のこの時期の転換を「現実」への傾斜とは全く正反対の方向を示す境地を披瀝した後、短期間のうちに瞿秋白の世界観に、従来までになく「二元性」を覆し再構築するような大変化が起こったと見るべきなのである⁽³⁵⁾かと述べているが、この「大変化」は如何にしておこったのだろうか。

注目すべきは「理智」の結論が「英雄」を否定し、「庸衆と同じ」とする事である。ここで『ロシア文学史』を思い返せば、「余計者」の系譜である貴族智識階級は「庸俗に対する強烈な個性」という「英雄」であったが、彼らは「市儈」の台頭よつて存在意義を失い、代わつて「平民」側に立つ「反市儈主義の闘将」という新たな知識人ゴーストに連なる知識人が登場することを瞿は述べていた。瞿自身もまた、「余計者」意識の克服として、中国の貴族智識階級である「士の階級」意識と決別し、同時に「反市儈」の意識を獲得することを必要としていたのではないだろうか。

三・ゴリキエ詩の翻訳をめぐる

(一) ゴリキエ「小市民層についての覚書」の時代的意義

翌年一月、モスクワでコミンテルンが極東大会を開催する⁽³⁶⁾と、彼は翻訳家として参加した。瞿は「赤都心史」に情熱的に大会の様子を記録し、中国革命の予感を描いている。その翌月、彼は中共に入党した。その後「新しい現実」「生活」というエッセイで無産階級革命に参与するための新しい人生観を語って『赤都心史』を終える。明らかに彼は「余計者」意識を克服したと考えられる。この「余計者」意識の克服と中共入党への転換は、五四以来の問題にロシアでの見聞や研究の中で解答が出されつつあったところ、極東大会の参加によって実感を得た結果だと思われる。だが、「土の階級」意識と決別し、内なる「市僧主義」を克服し、新たな知識人への転換を齎した決定的な契機とは何だったのであろうか。冒頭で述べたように、瞿は入党の月にゴリキエの詩を翻訳し、『赤都心史』に掲載した。実はこの詩は、一九〇五年十一月、ロシア第一革命の年に発表されたゴリキエの論文「小市民（市僧）層についての覚書」（以下「覚書」と略す）に挿入された諷刺詩であった。

ロシアでは、一九〇五年一月「血の日曜日」事件に端を発する第一革命が起こったが、十月に綵ゼネストが起こると、政府は出版の言論・自由を認めて「十月宣言」を公布した。これにより自由主義者が政治運動から乖離したため、革命弛緩ムードが漂う一方、労働者達は逆に急進化し、十二月のモスクワ蜂起に向かった。ゴリキエは一月のデモに加わり、夏にボルシェビキに入党する。そして「十月宣言」によって政治運動が停滞と急進に分裂した十一月、「覚書」をボルシェヴィキ機関誌『新生活』創刊号に掲載したのであった。

ゴリキエの「覚書」は「Мещанство（小市民根性≠市僧氣質）」の精神構造を描き出し、猛烈に批判したものであった。ゴリキエは、「小市民根性」とは「資本の奴隷」の精神、統治権力への奴隷根性、反革命のあらゆる精神だとする。

続けて、「小市民」が革命を抑圧する原因を次のように言う。彼らは「人民〔原文—народ〕」の犠牲の上に安楽な生活をしているため、常に人民に恐怖心を抱いている。時には人民に寄生して権力奪取を試みるが、革命が起こり人民の偉力を前にすると潜在的な恐怖が蘇り、権力側に寝返ると言う。そして、このような「小市民」の人生観を諷刺した詩が挟まれるが、これが瞿が翻訳した詩である。⁽³⁷⁾

〔原文〕 Не расуждай, не хлопочи. / Безумство ищет глупость судит. / Дневные раны шом лечи. / А завтра быть тому, что будет.
 / Живи — умей все пережить. / Печаль, и радость, и тревогу. / Что желать? О чем гужить? / День пережит — и слава бору...⁽³⁸⁾

〔瞿秋白訳〕 不用論断、不用操心；／無知的尋求、／愚昧的評論。／日間之傷、／請以夢治；／明日之日、／自然能至。／生活、生活、／万千經受、／哀矣、樂矣、／寵辱時有。／何所願望？／何為憂佛？／日既夕矣、／阿弥陀佛！⁽³⁹⁾

〔日本語訳〕 議論は止さつしやれ、くよくよしやるな、／氣狂いが告訴して、馬鹿めがさばく。／昼まの手傷は夢のうちに癒しやれ、／あしたはあしたの風が吹く。／生きてくためには—すべてを我慢しやれ、／悲しみ、喜び、心配ごとをも。／何をば欲しがり？
 何をば悲しむ？／その日が過ごせりや—御の字さまよ……。⁽⁴⁰⁾（下線部の改訳については後述。）

続けてゴリキーは、このような「小市民」の人生観は政治運動が挫折した一八八〇年代に隆盛したとする。そして、それを助長した知識人がトルストイとドストエフスキーであると指摘し、彼らの文学は現実への不満を抑圧する「小市民」文学であると言う。つまり、資本主義化する社会で形成された「小市民根性」は、ドストエフスキーらの知識人によって完成し、今や反革命的精神となつてロシアの「進歩」＝「革命」を妨げていると「覚書」は言う。そして、それを克服する道は唯一、社会主義であると述べた。

「覚書」が発表されると、直ちに知識人の間に賛否両論が起こつた。⁽⁴¹⁾ 論争後もゴリキー批判が相次いだが、とりわけゴリキーを根本的に批判したのは象徴派の長老メレジュコフスキーであった。メレジュコフスキーはゲルツェン
 の「小市民」観に影響を受け（一九〇五年ゲルツェン著作集が刊行され、大きな影響を与えた）、「小市民」を西欧文明の最終

段階と見なし、都市プロレタリアートの目標は「小市民」であつて社会主義ではそれを克服できないと結論づけた。そしてドストエフスキーはこれを予言した先覚者であつたと評価した。⁽⁴²⁾メレジュコフスキーのこのような危機感、ゴリキーの危機感と裏返しであろう。両者とも「小市民根性」がロシア社会を蝕むことに危機感を抱いている。だがゴリキーは「小市民根性」を「革命」の反動として批判し、それを克服する道を社会主義に見ると同時に、「進歩」の動力として「人民」を擁護した。そしてドストエフスキーを代表とする一九世紀ロシア知識人を「小市民根性」の起源として批判したのである。一方メレジュコフスキーは時代そのものの「小市民」化に憤り、一切の「進歩」を否定した。つまり彼は一九世紀の知識人意識を持ち続けたのである。

彼らの対立は一九〇五年の第一革命において、革命と人民に対する智識人の運命と、旧来の知識人意識の継承と断絶とを浮かび上がらせている。⁽⁴³⁾メレジュコフスキーが旧来の知識人意識を継承した背後には、ロシア知識人が伝統的に持つ「人民」への蔑視と恐怖があつた。つまりゴリキーが指摘したように、政治運動の手段としてきた「人民」が革命の力となつた時、旧来の知識人は潜在的な罪を感じて恐怖を抱き、革命から乖離したのである。ゴリキーにとつて「小市民」とは「人民」に寄生してきた知識人でもあつたと言えよう。つまり「覚書」は一九〇五年のロシア知識人に、「革命」という新たな政治運動における知識人の存在意義をめぐる問題を突きつけたのである。

メレジュコフスキーの態度は、第一革命後のロシア知識人の心情を代表するものだった。国内では再び象徴派が熱狂的に読まれる一方、「ゴリキーの終焉」が叫ばれた。だが当時、文壇で唯一ゴリキーを評価していたのが象徴派詩人のブロークであつた。ブロークは「人民」に恐怖を抱きつつも、「人民」の登場が意味するものと知識人の運命を敏感に悟っていたのである。ブロークは一九〇八年、「人民と知識人」という文章でゴリキーを次のように評価した。「ゴリキー現象は、〔従来乖離していた〕白井注〕人民と知識人を結びつける境界線上に起こつた最後の重大な意義ある現象である。知識人から見れば、ゴリキーの愛するものと愛する方法は恐ろしく理解できないものであることを、

ゴリキーは再三証明した。…彼は精神的には知識人ではないのである。…我々の愛情が腐乱性毒薬であるのに対し、彼は解毒剤を持つ―健康な血―を。」「知識人がますます〈死への意志〉に侵されつつあるのに対して、人民は古くから自身のうちに〈生への意志〉を持ち続けている。だから神を信ぜぬものがござって人民のもとに身を投じ、そこに生命の力を見いだそうとするのは当然である。これは、いわば自己保存の本能なのだ。…しかしゴリキーは疾駆するトロイカにロシアを例えた。そして、そのトロイカは、いま真つ直ぐに我々に向かって疾駆しているのかもしれない。だとすれば人民のもとへ身を投じるつもりが、狂ったトロイカの足元へ、確実な破滅へと身を投ずることになるわけである⁽⁴⁴⁾」。

ここに、一九〇五年を転換点とするロシア知識人の問題が集約的に現れていると言えよう。つまり、人民と知識人とが乖離してきたロシアにおいて、新たな政治運動の主力である「人民」が登場し、また「人民」に投ずる新しい知識人ゴリキーが登場した。一方、旧来の知識人たちは革命を理解せず、人民を怖れて革命から乖離した。だが、ゴリキーはもはや旧来の知識人とは異なる存在であった―即ち「彼は知識人ではない」。ブロークは、ゴリキーの登場は同時に「知識人」の消滅を意味していることを直観したと言えよう。

よって、一九〇五年のロシア第一革命において、ゴリキーの「覚書」には時代を画する二つの意義があったと言えよう。一つに、「小市民根性」を「革命＝進歩」を阻害する精神構造として批判的に描き出した事である。二つに、当時の知識人に対して、旧来の知識人意識との断絶を迫り、革命への参加か拒否かの選択を迫った事であった。メレジュコフスキーは「恐怖としてのナロード」を感じて革命と人民を否定した。一方ゴリキーは「良心としてのナロード」にかけて入党する。そしてゴリキーを羨みつつ、「知識人」の自覚から消滅の運命を受け入れたのがブロークであった。このように「覚書」は、ロシア知識人にとってまさに生死の選択を迫るものであると同時に、一九世紀以来の知識人精神と決別し、二〇世紀の新たな知識人として「人民」に参加するゴリキーの宣言でもあったと言えよう。

(二) ゴーリキー「小市民(市僧)」観の共有

再び『ロシア文学史』を見ると、最終章「一九〇五年十月革命と旧文学」は、ロシア第一革命前後に隆盛した象徴主義文学についての章である。その中で、瞿は象徴主義を新しい芸術ではなく旧文学の末期に位置づけ、資産階級文化の文学であるとした。そしてメレジュコフスキーを含む第二期モダニズムを資産階級の自由派とし、彼らの実質は「革命の傍観」者であり、革命に従事する作家に比べて「反革命的」ですらあると言う。⁽⁴⁵⁾ この象徴主義に對置されるのは、「反市僧主義の闘将」ゴーリキーであろう。つまり瞿は、一九〇五年におけるロシア知識人の対立と、対立の背後にある問題を、象徴主義とゴーリキーとの対立の中で理解していたと言えよう。⁽⁴⁶⁾

瞿が入党の月に、このような背景を持つ「覚書」の詩を翻訳したことは、一九〇五年のロシア知識人の精神的危機を我が身に感じ、詩の翻訳によって危機を克服する意図があったからだと思う。即ち、瞿はゴーリキーの「小市民」批判を共有し、自分自身の「市僧」批判にする意図があったのではないだろうか。

それは一つに、瞿が「士の階級」という旧知識人の意識を脱するためであったと考えられる。『ロシア文学史』に、貴族智識階級から「反市僧主義」知識人への転換が書かれたように、瞿もまた「市僧」批判を経ることによって、旧来の知識人から「反市僧主義」という新しい知識人へ転換しようとしたのではないだろうか。二つに、それは同時に、自分自身の要素でもある資産階級文化「市僧主義」を批判し、克服する試みでもあったと思われる。瞿は詩の翻訳の際、「Безумно 狂者」を「無知」に改訳している。⁽⁴⁷⁾ 先述したように、瞿にとって「無知」とは、民族性を理解せず「市僧主義」になる「個性」を指していた。瞿はこのような「個性」となることを拒否し、彼の内なる「市僧主義」を自己批判的に克服し、「人類の新文化」創出に向かう契機を得る必要があったと思われる。

これが瞿の、一九二二年二月における詩の翻訳意図であると思われる。瞿は、「余計者」意識が表出し、旧い知識人意識に囚われた存在の死生の瀬戸際において、人民に与する「反市僧主義」という新しい知識人ゴーリキーの、その

最も先鋭的な現れである「覚書」における「小市民」観を共有することにより、彼もまた旧来の知識人意識と決別し、到来する中国の革命に参与する知識人としての存在意義を獲得しようとしたのではないだろうか。そして、翻訳された詩は、そのような道を受け入れた瞿の決断の表明だったと思われる。あるいは翻訳によって転換を可能にしたと言えようか。

だが彼にとつて、この転換は希望に満ちたものではなかったと思われる。前出のエッセイ「中国の『余計者』」の冒頭には「ルージン」の一節が付されている。この節は、ルージンが自分の「心」の欠如を述べ、「智」によって生きる虚しさを述べる下りである。当時、「心」と「智」の矛盾に苦しむ瞿は、ルージンの苦しみを共有していたと言えよう。だが瞿は入党後の一九二三年、「智」が勝利する話であるゴリーキー『イタリア物語』第八話を翻訳するのである。

『イタリア物語』第八話は、熱烈な社会主義者と信仰深い娘との恋愛を描いた話である。双方は主義と信仰のために結ばれず、やがて娘が死ぬ時、男が臨終の床に駆けつける。最期に娘は自分の信仰の過ちを告白するが、信仰は「理性」とは別だと男に訴える。この物語のテーマは単純に言えば、革命における理性（「智」）と感情（「心」）の葛藤であろう。語り手は最後に「心」の苦しみと「智」の矛盾を述べるが、それでもそれらを超えて自由へ向かう事を述べる。瞿はこの一段の「心」と「智」を強調するのである。「瞿秋白訳」一定有許多人的『心』被那黯晦的陰氣所襲着，有許多人的『智』充满着矛盾……可是，我們大家走向自由，走向自由！⁽⁴⁸⁾

この「心『cepline』」と「智『ym』」は瞿の改訳ではないが、強調するところに彼の意図がうかがえよう。瞿が物語に付けたタイトルは「時代の犠牲」であった（注―原作は無題）。瞿もまた「市儈」批判を経て、「智」によって葛藤する「心」を抑え、革命へ向かった。だが両者の矛盾は常に存在したと思われる。しかしそれを「犠牲」と名付けつつ、あえて「智」が勝利する物語を翻訳したことに、彼の苦渋を見ることができよう。

また、一九二三年一月、彼は帰国直後に「政治運動と智識階級」（『向導』一八期）という文章で次のように述べている。

智識階級とは一体何であるか？（略）教育の絶対的な平等が可能なほど生産制度が発達していない時、智識階級は往々にして社会文化を代表する地位に立つ。これは智識階級が誇る事でもない、なぜなら、まさに当時の士紳が優越的な権利を享受しつくしたことに因るからであり、現代の学生達は生産の余剰―労働平民の血と汗のお陰で初めて「智識」を持つことによって文化を代表する事ができるからである。智識階級は労働平民に対して何と重大な責任を負うべきであることか！況や、この新旧の潮流が衝突する時、中国社会の生死存亡の瀬戸際に置いてをや！しかし、しかし、政治運動は「良心」に頼るだけでは用をなさない。智識階級は結局のところ社会の喉舌に過ぎず、どうしても主体になれない。⁽⁴⁹⁾

瞿は到来する政治運動の「主体」を民衆に置き、知識人の存在意義を補助具としての役割に見ている。そして民衆が登場した暁には知識人が無用になることも示唆しているのである。

このように瞿にとって新しい知識人の道は「死への意志」を抱え込んでの転換であったと言えよう。ブロークがゴリキーを羨みつつ、知識人の自覚から「死への意志」を持ち続けたのに似て、瞿秋白は人民の側に立ち革命に参与するという新しい時代の知識人の道をゴリキーに見いだし、その道を受け入れながら、なおその裏には「死への意志」を抱え、知識人の消滅を見すえていたと思われる。⁽⁵⁰⁾

終わりに

以上、瞿秋白が「反市儈主義」の知識人ゴリキーを発見し、その「市儈（小市民）」観を自己批判的に共有することによって、自らも政治運動に参加する道を見いだす過程を考察した。瞿秋白にとって「市儈」意識とは、旧知識人「士階級」意識と決別し、新しい知識人となる転換を齎した、新旧の狭間にある両義的な意識であったと言えよう。瞿は「市儈」意識を自己批判的に乗り越えたのであり、ゴリキー詩の翻訳はその表明であったと思われる。翻訳した詩にゴリキーの名が付されなかつたのは、翻訳が瞿の根元的な、個人的な行為だったからではないだろうか。

但し、当時の瞿の「市儈」概念は観念的な文化・階級概念に留まっておらず、一九〇五年のロシア知識人が恐怖を抱いたような「市儈（小市民）」観と比べて、切実な実感に希薄であったように思われる。彼がそれを実感するのは、北伐を経て、民衆が政治勢力とされ始めた一九三〇年代であった。その時、瞿は革命における知識人の存在意義を再考する必要に迫られるのであるが、同時に「市儈」の問題も見直すことを余儀なくされる。実は、この詩は一九三三年二月にも再訳されている（「市儈頌」）。この時期は、瞿が党内批判によって沈黙を余儀なくされてから、再び発言を始める直前にあたる。⁽⁵¹⁾ 彼が革命における知識人としての自己を根底から問われた時、同一のゴリーキー詩を翻訳したのは偶然ではないだろう。この問題は『魯迅雜感選集』序言⁽⁵²⁾及び『多余的話』の成立と密接に関わると思われる。一九三〇年代の瞿におけるゴリーキーと「市儈」観は、別稿で述べたい。

注

- (1) 「多余的話」『瞿秋白文集』（政治理論編）第七卷、人民出版社、一九九一年。以下、「多余的話」は全て同全集からの引用とし、所出は省略する。「多余的話」の校勘については劉福勳『心憂書（多余的話）』（上海社会科学院出版社、一九九三年）を参考にした。
- (2) 例えば、「多余的話」の否定的な評価は、文革期の周恩来の意味づけが代表的である。一九八〇年の名誉回復以後においても、例えば王維礼・杜文君「再評瞿秋白の〈多余的話〉」（『北方論叢』五期、一九八二年）は、「多余的話」を評しながらもそこに現れた思想を批判している。反対に『多余的話』を「Self Expression」として高く評価したのは Hsia Tsi-an, "CHU CHIU-PO : THE MAKING AND DESTRUCTION OF A TENDERHEARTED COMMUNIST," in *The Gate of Darkness — Studies on the Leftist Literary Movement in China*, (University of Washington Press), 1968, 3-54 である。
- (3) 銭理群「豊富的痛苦：「堂吉訶德」与「哈姆雷特」的東移」、時代文芸出版社、一九九三年、二一九～二九九頁。
- (4) 「多余的話」、七〇一～七〇三頁。
- (5) 銭理群、前出論文、二二〇～二二二頁。
- (6) 瞿秋白の中共入党時期は、一九二二年九月と一九二二年二月の二説がある。本稿は、一九二二年五月ロシア共産党予備黨員

に加入、九月ロシア共産党正式入党、二月中国共産党に正式入党という経歴を採用した。但し、一九二二年二月が瞿の思想的転換でもあることは、註2(注2)、陳正醜(注35)も指摘している。よって本稿の内容は入党の正式な時期に左右されるものではないと考える。姚守中、馬光仁、耿易編著『瞿秋白年譜長編』(江蘇人民出版社、一九九三年、八四、一〇二―一〇三頁)、陳鉄健『從書生到領袖—瞿秋白』(上海人民出版社、一九九五年、一四五頁)、王觀泉『一個人和一個時代—QJB』(天津人民出版社、一九九一年、第二七―二九頁)、楊之華『回憶秋白』(人民出版社、一九八四年、第二八頁)を参考にした。

(7) 実際、瞿が「市僧」という言葉を初めて使うのはロシアに向かう途中のハルビン滞在中である。但し、それは単発的な使用であり、またその意味は本文で論じた「市僧」観に含まれると考えるため本文での言及は控えた。「餓郷紀程」(『瞿秋白文集』(文学編)第一卷、人民文学出版社、一九八五年)、第四七頁を参照のこと。以下、「餓郷紀程」は全て同全集からの引用とし、所出は省略する。

(8) 「赤都心史」『瞿秋白文集』(文学編)第一卷、人民文学出版社、一九八五年、一一九頁。以下、「赤都心史」は全て同全集からの引用とし、所出は省略する。

(9) 「餓郷紀程」、三一頁。

(10) 瞿の文化史観と革命観の形成については、姫田光義「瞿秋白について」(野沢豊編『中国国民革命史の研究』所収、青木書店、一九七四年)に詳しい。

(11) 「赤都心史」、一一八頁。

(12) 「赤都心史」、一一七頁。

(13) 「蘇維埃俄羅斯之經濟問題」『瞿秋白文集』(政治理論編)第一卷、人民出版社、一九八七年、二五五―二八七頁。

(14) 「赤都心史」、一七一―一二二頁。

(15) 「赤都心史」、一五六―一五七頁。

(16) 曹靖華の回憶によると、当時流布していた唯一のロシア語辞書は程耀臣編『華俄合璧商務大字典』(哈爾濱：広吉印書館、一九一七年)である。しかし現在閲覧が不可能であるため、当時の「Memarrh」の訳語が「市僧」のみであったかは不明である。

(中国国家図書館、上海図書館、中国科学院文献情報中心、各大学図書館及び日本国立国会図書館、各大学図書館に所蔵なし)。
『俄漢大辞典』(商務印書館、一九六三年)では「Memarrh」に「小市民」と「市僧」という二つの訳語を付す。説明によると

「小市民」が階級を表す客観的な言葉であるのに比べ、「市儈」は蔑視語である。なお、その性質を指す「Мещанство」を「市民階層、小市民」「市儈習気」とする。ちなみに『漢俄詞典』（商務印書館、一九七七年）では「小市民」「市儈」の訳語はどちらも「Мещанин」である。本稿では瞿の文章に即して「市儈」概念を明らかにすることが目的であるため、「Мещанин」＝「市儈」＝「小市民」とすることに支障はないと思われる。曹靖華「嘆往昔、独木橋頭徘徊無終期！」『花』、作家出版社、一九六四年、一九二～一九三頁。

(17) 『ロシア・ソ連を知る事典』、平凡社、一九八九年。

(18) スローニム著、池田健太郎訳『ロシア文学史』（新潮社、一九七六年）、一五〇～一五九頁を参考にした。

(19) 「赤都心史」、一六八頁。

(20) 「俄国文学史」は後に蒋光慈『俄羅斯文学』（上海創造社出版部、一九二七年）の下巻に「十月革命前的俄羅斯文学」として組み入れられた。蒋光慈「書前一篇」によると、原稿は瞿の同意を経て蒋が添削したと言う。その添削部分は不明だが、現在文集に収録されている「俄国文学史」の殆どが瞿の記述であることは他の研究者も指摘している。Ellen Widmer, "Qu Qubai and Russian Literature," in *Merle Goldman ed., Modern Chinese Literature in the May Fourth Era* (Harvard University Press), 1977, 103-125を参照のこと。なお瞿が集中的にロシア文学を研究したのは、ネップ開始直後と推察される。「多余的話」、六九六頁を参照のこと。

(21) 「俄国文学史」、一七七頁。

(22) 「俄国文学史」、一九九頁。

(23) 「俄国文学史」、一六七頁。

(24) 「俄国文学史」、一八三頁。

(25) 「俄国文学史」、二〇三頁。

(26) 「俄国文学史」、二〇一頁。

(27) 「俄国文学史」、二〇六頁。

(28) 「俄国文学史」、二一一頁。

(29) 「赤都心史」、二一一頁。

- (30) 「餓郷紀程」、二三頁。
- (31) 「赤都心史」、二二三頁。
- (32) 「赤都心史」、二二二―二二三頁。
- (33) 「赤都心史」、二二三頁。
- (34) 「赤都心史」、二一九―二二〇頁。
- (35) 陳正醒「一九二〇年代初期の瞿秋白における「人生」と「世界」―「赤都心史」のチュツチェフ詩の翻訳を中心に―」『明治大学教養論集』三三四、一九九九年。陳正醒氏は瞿秋白の世界観を「宇宙」「現実」等の概念を中心に分析し、瞿が極限的な思索に迫られた一九二二年一月に訳したものがチュツチェフ詩であったとする。陳氏の視点は本稿とは異なるが、チュツチェフ詩の翻訳時期は「余計者」意識が表出した時期に重なっており、瞿の世界観の変化と「余計者」意識の克服過程は重なると考えたため、陳氏の言葉を引用した。
- (36) コミンテルンが主催した「極東各国共産党及び民族革命団体第一回大会」を指す。中共中央党史研究室「中国共産党歴史大事記一九二九、五一―一九九〇、一二」人民出版社、一九九一年、一二頁。
- (37) ゴーリキーが、「覚書」に挿入した詩は、実はチュツチェフの詩の引用であった。原詩との異動は第四行第三、四句「ЧОКУ, а」であるが、語彙を調べた結果、意味的な変化は無いと判断した。瞿はチュツチェフとの関係も深い（注35を参照）、後に同じ詩を翻訳する際、原作者を「M. 高爾基」とし、次のような注釈を付けた事からも、ゴーリキーの詩として翻訳したことが分かる。「高爾基后来簡直不做詩。市僧頌這一点短短的諷刺詩，是夾在關於市僧里面的，還是十月革命前所作，載一九〇五年的新生活報。」〔市僧頌〕「訳文」一卷一号、一九三四年九月刊。
- (38) M. ГОРЬКИЙ, «ЗАМЕТКИ О МЕШАНСТВЕ», («ГОРЬКИЙ СОБРАНИЕ СОЧИНЕНИЙ», том 23, Государственное издательство художественной литературы, Москва, 1953, pp.345-346.
- (39) 「赤都心史」、二二九頁。参考に孟昌の訳を付す。「不要發議論，忙什麼呢？／瘋狂才有所求，愚蠢才會貴難；／白天的創傷，睡了一覺也就好了，／明天該怎樣就怎樣吧。／活着——就要能忍受一切：／悲哀，快樂和憂慮。／希望什麼呢？干嗎要感傷？／又活過了一天——謝天謝地！」（孟昌選訳「談談小市民習氣」『高爾基政論雜文集』、生活・讀書・新知三聯書店、一九八二年、一八八頁。底本は前注と同じ。なお簡体字は常用漢字に改めた。）

- (40) 大塚博人訳『ゴリキキー選集』一五巻(政治社会評論)、青木書店、四四頁。
- (41) 論争については、黒田辰男監修・ソヴェート文学研究会訳編『二〇世紀ロシア文学年譜(一九〇五―一九〇七)』第二巻(東
宣出版、一九七三年)、第七一―八二頁を参照のこと。
- (42) メレジュコフスキーの「小市民」観については、後注(43)の二論文と、徳・謝・梅列日科夫斯基著、趙桂蓮訳『先知』(東
方出版社、二〇〇〇年)を参考にした。
- (43) 一九〇五年におけるロシア知識人の思想状況については以下の二論文から大きな示唆を得た。江川卓「一九〇五年の意味し
たもの」、江川卓・栗原幸夫・池田浩士『座談会』ロシアの文学革命と現代』『文学』四七巻九号。なお本稿で用いた「恐怖と
してのナロード」「良心としてのナロード」という言葉は江川氏の言葉である。
- (44) 亜・勃洛克著、林精華等訳「人民與知識分子」『知識分子與革命』、東方出版社、二〇〇〇年、第五八―六二頁。翻訳は注
(43)の江川論文を参考にした。
- (45) 「俄国文学史」、二一六頁。
- (46) 「覚書」の詩を含む部分は、当時は新たに印刷されず全集などにも収録されていなかったため、瞿秋白はモスクワ滞在中、原
版の『新生活』に掲載された「覚書」を見たと考えられる。故に「覚書」をめぐる論争についても認識していたと考えられる。
「覚書」の出版状況については大塚博人訳、ゴリキキー著『初期の革命的社會評論集』(太平社、一九四六年)、二三四―二三五
頁を参考にした。
- (47) 原文の「Безумство」には「瘋狂」の意味があるが「無知」の意味は無い。『俄漢大辞典』(商務印書館、一九六三年)。
- (48) 瞿秋白訳「時代の犠牲」『瞿秋白文集』(文学編)第一巻、人民文学出版社、一九八五年、三四三頁。
- (49) 「政治運動與智識階級」、『瞿秋白文集』(政治理論編)第二巻、人民出版社、一九八八年、三―四頁。
- (50) 瞿秋白の自己否定的な知識人観については、植田渥雄「瞿秋白の知識人観」(駒沢大学外国語論集)一期、一九七二年)を
参考にした。
- (51) 石源華「王明路線在一九三三年對瞿秋白的批判」(復旦學報(社会科学版))四期、一九八三年)を参照のこと。